鎌倉つれづれ ㊿

アジサイの向かう道

池田正弘

今年の6月は忙しくて、いわゆるアジサイ名所を気になりながらもどこも訪ねることができなかった。石田幹之助著「長安の春」には『牡丹の花が満都の春を占断して王者の如くに咲き誇り、城中の士女は家を空しくして只管に花の跡を追うて日を暮らす』とある。これに倣えば古都鎌倉にアジサイの花を求めて三々五々、平日でもアジサイ巡りの人波が続くということになる。しかしボタンは長くても開花期は1週間、アジサイは早咲きのヤマアジサイは5月の半ばから遅咲きのガクアジサイは7月いっぱいまで咲き続ける。只管にアジサイの花の跡を追って暮らす人たちは2カ月半を費やさなければならない。そういう人を鎌倉だけでも何人も知っている。

今、母の日のプレゼントはカーネーションを抜いてアジサイの鉢植えがトップだそうである。生産者は5月に出荷の最盛期を迎え、群馬、栃木の生産者に6月にアジサイの鉢を頼んでも手持ちの花は殆んど残っていない。

2カ月の花期では、まだ足りないのか最新の品種は四季咲きを売り物にしている。自然界で発見されたアジサイにも四季咲きはあった。ハチジョウチドリ、ミヤケトキワは何れも四季咲きの八重花である。名前で分るように見つけられた地は、それぞれ八丈島、三宅島である。アジサイは気温17度で花芽を形成する。

一年中咲き続けている最新品種

四季咲き八丈千鳥

四季咲性のものは17度以上の気温下でも花芽を作って次々と開花してくれる。おそらく最新品種は交配で四季咲きの性質を備えさせたのだろう。

一年中花が絶えないのは有難いが、欠点もある。八丈島も三宅島も冬でも温かい土地である。この両種とも冬の寒さには弱い。霜にあてれば一晩で萎れて葉を落としてしまう。発表された最新品種も正月に咲きますをうたい文句にしながらも生育に6度以上を保つようにと注意書きがある。我家で2月に咲いた鉢が今も咲き続けている。そのうちクリスマスの花も正月の贈り物もアジサイになるのだろうか。

かつてといっても20年程も前のことだが日本のどこそこで八重の花が見つかったと聞けば大騒ぎしたものだった。交配技術の進歩か園芸店に行けばどんなアジサイでも目にするようになった。日本アジサイ協会を設立した故山本武臣さんはサトウハチローの詩に「誰にも気づいてもらえないアジサイ」という意味の一節があるとアジサイの不人気ぶりを嘆いていた。

一年中花が咲き、とりどりな色があり、様々な花弁ありの現代アジサイ事情を泉下で喜んでおられるか否か。

アジサイ鑑賞家を自称している己が多化を言い訳に今年アジサイ名所を訪ねなかったのは無意識に避けたのだろうか。

エングラーの分類体系ではアジサイ類はユキノシタ科に分類されてきた。遺伝情報を記録するDNAを分析して得た情報を基礎にした分類ではアジサイ類はアジサイ科としてミズキ科などと共にミズキ目を構成しキク類の一員とされている。これからアジサイはキクと同類となり近縁種はミズキの仲間で同じアジサイ科にクサアジサイ属、ウツギ属等が含まれる。

武士や鎌倉大仏が大行進

鎌倉市民カーニバル

5月15日の大船まつりで開幕した「鎌倉市民まつりウイーク」最終日の5月22日、晴天の下、市民を中心に155人が「鎌倉市民カーニバル」の仮装パレードを行った＝写真。

1934年に始まり、戦争による中断を挟んで62年まで開かれ一大イベントだった「鎌倉カーニバル」の熱気を呼び戻そうと市商工会議所や観光協会などが中心となって企画。「鎌倉の歴史と文化」をテーマに参加者を募った仮装パレードで、当日は、甲冑姿の武士、弁慶や鎌倉大仏が鎌倉駅西口を出発し、御成通り、下馬を経て由比ガ浜海岸まで行進し、鎌倉ビーチフェスタの特設ステージで紹介され、大勢の見物客でにぎわった。

和賀江島清掃活動40回

市民や交流団体ら430人が参加

鎌倉市材木座海岸の東端に位置する国指定史跡で日本最古の築港遺跡「和賀江島」の清掃保全活動が5月22日に行われた＝写真。40回目の今年は、例年の倍を超える約430人が参加。

住民や商店会、鎌倉岩手県人会（早川正行会長）、和賀江島築港に奥州の和賀盛綱が関わった縁で1995年から参加している岩手県の北上市和賀江島清掃団（佐藤克英代表）が中心となり、